



第6分科会

「山形発！私たち高校生が考えること、できること ～これからの世界を語ろう！～」

- 担当：阿部真理子（認定NPO法人IVY）、三澤香織（JICA山形デスク）
- 発表者：小松真緒／佐久間萌（山形県立新庄北高等学校）、石川美咲／山口未紗（九里学園高等学校）
長澤パティ明寿／若林恭佑、竹田彩乃／佐竹美咲（山形県立山形東高等学校）
- 分科会のねらい・目的：
 - ・県内の高校生が取り組む国際分野に関する取り組みを、他校の高校生及び一般の方に知っていただく機会とする。
 - ・県内の高校生が集い、自身が持つ意見を交換し合い交流する機会とする。
- 参加者人数：35人

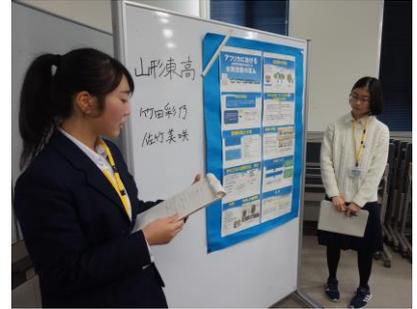
1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク 進行：青山登和氏 （山形東高等学校）	<p><u>「共通点探し」</u></p> <p>グループごとに共通点を探しあい、その個数を競った。 「山形市出身、食べることが好き、兄弟がいる」など様々な共通点が挙がり、盛り上がった。</p> 
ポスターセッション	<p><u>ポスターセッション</u></p> <p>* 発表時間 10分（7分間の発表+3分間の質疑応答） * 参加者が各発表ブースを回り発表を聞き、黄色の付箋によかった点・感想を記入、青色の付箋に質問・疑問を記入し、ポスターに貼っていく。</p> <p><u>各ポスターセッションの概要</u></p> <p>【発表者：長澤パティ明寿さん／若林恭佑さん（山形県立山形東高等学校）】</p> <p>* 「高校模擬国連」活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬国連とは、国連会議などの国際会議を主に中・高・大学生などが運営も含めてシミュレーションする教育・サークル活動。 ・ 模擬国連を通して「国際問題への多角的考え・リサーチ力・交渉力…等々」が身に付く。 ・ 目標は高校模擬国連世界大会への出場と多くの人、特に県内の高校へ模擬国連の魅力を伝え、普及に貢献すること。そのために「校内模擬国連」や「CHALLENGE! 模擬国連 IN 山形」を開催する。 <p>* 「ユネスコ創造都市やまがたが結ぶ世界の絆」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 映像分野でのユネスコ創造都市ネットワークの交流を通して、山形市と他地域との相互理解や国際理解を深めたい。特に高校生同士の交流を通して、海外の都市間との交流を育み、ユネスコ創造都市山形の発展、世界平和のための対話の環境作りに寄与したい。 ・ インドネシアパプア州との交流や、放課後上映会など計4回のイベントを企画実施した。 ・ 今後は、市民や高校生の国際交流や創造都市への関心を高め、当分野での若者の活動を発展させていきたい。 

【発表者：竹田彩乃さん／佐竹美咲さん（山形県立山形東高等学校）】

* 「アフリカにおける自然浄化能力を生かした水質改善の試み」

- ・ 清潔な水が手に入りにくいアフリカの課題を日本の技術を用いて改善したい。汚れた水によって健康被害にあっている貧困層にとって「低コスト」で「使いやすい」ことが大切。
- ・ 対象国をウガンダとし、ウガンダで手に入るものを用いて「ろ過機」を作成。ペットボトルの中に、下から布、燻炭、砂、砂利の順に入れ層を作り、上から水を入れ、ろ過した水が下から出る仕組み。
- ・ ろ過能力（汚れの除去）の実験検証を行い、下記の結果が得られた。
 - 層の隙間に細かい粒子が入ったことで、ろ過能力があがったため、回数を重ねるごとに水は澄んでいった。
 - 隙間が小さくなったことで水が通りにくくなり、水の出る速度が遅くなった。
- ・ 今後はろ過機能の向上、大腸菌の除去方法の検証、ろ過装置のマニュアル作成を予定。



【発表者：石川美咲さん（九里学園高等学校）】

* 「置賜地区に住む中学生の外国文化に対する興味・関心、及び積極性の調査」

- ・ 置賜地区のグローバル教育の現状を明らかにすることを目的に、置賜地区の中学生を対象にアンケート調査を実施した。対象：置賜地区の中学3年生59名（市内34名、市外25名）。

（質問項目）

- ①外国のスポーツ選手やアーティストを知っている。
- ②海外に行きたい。
- ③具体的に行ってみたいところがある。
- ④将来、外国人と仕事がしたい。
- ⑤同年齢のアメリカ人と話せる程度に、自分も英語を話せるようになりたい。
- ⑥英語以外の外国語も勉強したい。
- ⑦外国の事を少しは知っていると思う。

（アンケート結果）

回答方法 1：はい、2：どちらかといえばはい、3：どちらかといえばいいえ、4：いいえ

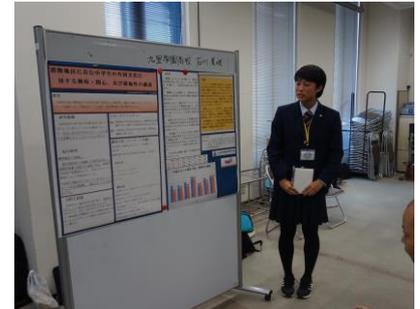
	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7
米沢	2.24	2.09	2.33	2.91	1.79	2.39	2.55
置賜	1.64	1.88	2.00	2.88	1.80	2.12	2.64

- ・ 質問1、2、3、5、6に関して前向きな回答が見られた。このことから置賜地区の中学生は外国文化への興味関心、積極性が比較的高いといえる。今後は、高校入学後の意識の変化を検証すること、また中学校教員への調査も必要と感じた。

【発表者：小松真緒さん／佐久間萌さん（山形県立新庄北高等学校）】

* 「多文化共生を考える～新庄国際化プロジェクト」

- ・ 新庄市は外国の方が少なく、多文化ではない？→海外の方を呼び込むことで新庄市の活性化につながるのではないかと→そのために新庄市と似ている所を調べる。
- ・ 群馬県大泉町を調査し「大泉町の取り組みを真似すれば、新庄も国際化するのか？」を検証。



- ・大泉町は産業の町であり、外国人労働者が増えた背景がある。
 - 大泉町の取り組み：ブラジル人向けの商店街、ポルトガル語の情報誌や防災マップ等々。
- ・新庄市在住外国人への新庄市に関するインタビュー：
 - 店が早く閉まる、漢字が難しい、新庄市を知らなかった等々⇒制度が整っておらず住みやすくない。
- ・外国の方がもっと住みやすくなるためには「制度（大泉町の取り組みを取り入れてみる）、気持ち（外国人を避けてしまう市民性を改善する）、PR/SNS（優しい日本語や英語を活用）」が大切。



【発表者：山口未紗さん（九里学園高等学校）】

*「米沢市の多文化共生を目指して」

- ・外国人にとって住みやすい米沢市を築くことを目的に、食事面、安全面で住みやすい市であるのかを明らかにするためアンケート調査を実施した。対象：山形大学工学部留学生9名。

(アンケート結果)

- ・食事面に関する質問の回答：
 - 飲食店にてメニューの英語表記及び写真と一緒に記載してほしい。材料がわからない、宗教による食事の取り方の違いに飲食店が対応することで、日本食にアクセスできるようにしてほしい。
 - 非常口を日本語以外でも表記してほしい。
- ・安全面に関する質問の回答：
 - 災害時は、避難場所や避難バックの準備の仕方、災害の種類などの情報がほしい。
 - 災害時はEメールや市のfacebook、テレビ、大学経由で情報を伝えてほしい。
 - ハザードマップを知らない外国人がほとんどであり、米沢市にハザードマップがあることは誰も知らなかった。
- ・アンケート結果から、飲食店のメニューの表記に苦労していること、日本食を味わいたいが、調理法や材料がわからないため、食べることができない現状、災害時は必要な情報を多言語で提供する必要、また伝達方法も検討する必要があることがわかった。
- ・今後は市内飲食店及び、市役所に問題提起を行い、アクションプランを共同で作成する。



全5グループの発表を聞き終えた後は、小グループで発表を受けての感想を共有。

ディスカッション

ディスカッションテーマ「持続可能な高校生活動とするためには、どうしたらよいか」

ファシリテーター:

阿部真理子

小グループごとにテーマに基づいてディスカッションを行った（高校生同士のグループ、高校生以外のグループに分かれて実施）。

- ・先輩から次の世代（1年生）へ伝える。学年を超えた共同研究を行う。
- ・学校から地域へ活動の場を広げる。大学や他機関、JICA等と連携する。
- ・中学生の時から国際交流や国際理解に触れ、学ぶ。
- ・高校生が集まれる場や高校生同士を知る場を作る。



	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の発表のような取り組みを教員側も知り、経験することが大切。 ・「国際分野に興味がある人」の存在感を大きくしていく。
<p>ワークショップ 体験 ファシリテーター： 阿部真理子</p>	<p>ワークショップ「豊かさと開発」より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「豊かな社会にとって大切なこと」を各自カードから順位をつけて選び、その後グループごとに順位をつけた。豊かな社会ということで、選ぶカードがそれぞれ違うことを知り、求めるものが違うなかで豊かな社会を作っていくにはどうしたらよいかを考えるきっかけとなった。



2. 使用した教材や参考資料

- ・ワークショップ「豊かさと開発」開発教育協会（DEAR 発行）

3. 参加者アンケート

- ・沢山の高校生と交流できてよかった。他の学校の研究を聞くことで、刺激を受けた。今後自分もそういうことをしていくので、参考にしていきたいと感じた。また他校生と話す場があってよかった。
- ・山形の高校生たちの発表を聞いて、とても刺激を受けた。普段話すことのない人たちと話すことができ、とてもいい経験になった。研究の方法がとても参考になった。
- ・様々な研究をしている高校生の話を聞いて、一方的に自分ができていることを考えるのではなく、活動が自分たちの地域にどのように還元されるのかまで、考えることが大切だと思った。視野を広げられてよかった。
- ・貴重なネットワークを広げられ、次の活動への大きなモチベーションにつながった。他校の高校生と意見を共有し、今自分の持っている課題へのアイデアを得られたことに大変満足している。ぜひ来年もよろしくお願いします。
- ・高校生の活発な姿に感動。高校生同士で意見・学校の情報を交換している場となっていた。非常に面白かったです。
- ・高校生の研究発表を聴くことができ今の学生さんたちのレベルの高さに驚きました。色々な年齢の人とも交流ができて大変有意義な時間でした。個人的には SDGs に興味があるので大変参考になりました。

4. 担当者所感

【ファシリテーター：阿部真理子（認定 NPO 法人 IVY）】

高校生がお互いの活動の発表を聞く、それも国際というジャンルの活動に限定しての発表だったわけだが、海外への関心が低くなっていると言われていたにも関わらず、これほどまでに多くの高校生が参加してくれたのは驚きだった。来年に向けて、参加する高校をどう選ぶか、参加者同士の交流をどのような形にするか、どんな話し合いを行ったらいかなど課題はあるが、来年も継続出来たらと思う。また、高校生だけの分科会がいいのか、高校生以外の人たちとの交流の場にするのがいいのか、一年かけて考えていきたい。

【ファシリテーター：三澤香織（JICA 山形デスク）】

高校生による分科会を今年度初めて企画実施を行った。各高校生からの内容及び発表は素晴らしく、参加者からも高い評価を得ていた。発表を行った高校生にとっても、自身の研究を一般の方に知っていただく機会となったこと、また発表を聞いた参加者より、様々なコメントやアドバイスを受け、今後の更なる研究へと続く意見や視点を得ることができたことも分科会の成果であると感じた。

高校生が研究や取り組みを続けていく上で、更なるリサーチやアクションの実現性を考えた際に、JICA や外部機関などの存在を知っていただき、活用いただくことが持続可能な活動にもつながっていくと感じる。今後もこういった機会の設営、研究に対する支援を各機関と連携し行っていきたい。